

◇ 国 語

国 4-1～国 4-15 まで 15 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

どんなに単純なことにも、たいてい複数の原因があつて、他との関係抜きで在り得ないのは大方の事物の運命であるらしい。人間とてもその例外ではなく、自分一個の生存を考えてもことは決して単純でない。

今をよりよく知ろうとして、今を今として成り立たせている過去を知ろうとするのは、少なくとも驕きょうまん慢でない人間の自然であり、それは、今後をいかに選択するかに直結しているという意味において **ア** な行為のはずである。

実生活の具体的な様相や人間の心用いのみさまざまは、歴史書よりも物語のほうにずっとくわしいと言つたのは「源氏物語」の作者であつたが、日本人の歴史、ことに感受性の歴史を辿たどらうとする時、なるほどその具体性において文学作品を超えるものはまずないと言えよう。

歌においても、日記物語においても、そこに表されているのは一般的男女ではなく、**甲** つねに個々の特殊具体的な男女であつて、その男女の喜怒哀楽の具体相こそ過去の日本人の感受性の手がかかりなのである。たとえつくられた作中人物のそれでも、作者の認識の外ではない。作者は意識的に、あるいは無意識的に、同時代の人と生活を借りながら、自身の喜怒哀楽の **イ** な表現を企む。

したがつて、読者としては、物語の筋書だけでなく、作者の感受性の法則にもあやかれるわけで、具体的なイシヨウAで共感や違和感を確かめながら、併せて過去の日本人の分析、帰納を行うことが可能になる。

文学というのは、人間のどのような状態も、素材である限りまるごとヨウニンBされる寛大な器である。ここでは理性も感性も対等な重みを与えられていて、主従の関係はない。文学には **乙** 素材は何一つない。

ただし、それをどのように表現にまで高めるかに作者の存在が問われているのは、千年の昔も今もまったく変わっていない事柄と思う。そして、いい作品に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもやほらげ、猛き武士の心をも慰むる」効用のあることもまた、こう言つた紀貫之Cの時代と同じだと思つのである。

古典を読むことの意味に、日本人の感受性の過去を知ることと言ってきたが、それは、日本語の歴史を知ることだと言い換えてもよい。日本語の今をよりよく知ろうとして、日本語の今を今として成り立たせている過去を知ろうとする、それは今後いかに自分の日本語を運用していくかに直結し得る行為である。

もつとも、認識と実行の隔りは、「話す」「書く」においてケン^①チョ^②なので、認識の強調は何となく気がひけるが、「読む」という全身の経験にもとづく共感と違和感が、「話す」「書く」自分に与える悔り難い影響を思うと、たとえそれが、よくない言葉づかいにエイ^③ビンに反応する言語感覚、言語認識の育成というほどのものであっても、私はそれを大切と思う。自分の言葉づかのための法則を得ればそれにこしたことはないが、目的に走ると

丙

古典は、はじめから押しただいて読むべきものではあるまい。作者が喜怒哀楽を強調しているのだから、読者も自分の力に応じて素直に親しみ、反発していいと思う。反発することがあり、違和感をおぼえる部分があっても、すぐれた作品には必ずそれを上まわる魅力がある。感歎するばかり、という時期は、私の場合、まだ「要警戒」である。

素直な読みにだけ与えられる恩恵の大事を思う時、「古言を知らずは古意は知られず」と言った本居宣長の姿勢が思い返される。「古の言葉」に「古の心」を語らせよう。それが宣長の古典学における ウ な立場であった。古典の一愛読者に過ぎない私も、この姿勢の大事に思いついて久しいが、古文や古語に語らせるように読むことは決して易しくはない。

しかし、日本人の感受性の法則も、日本語のいい運用の法則も、語らせるように読む時と読む時とだけ、ひらめきのように感じられるものだとしたことだけは、いくらか実感できるようになった。年老いて、時間が出来たから静かに古典でもという人があるが、とんでもない 三 古典を読むには相当のエネルギーがいる。若さがある。根気がある。

やまと歌は、人の心を種として、よろづ言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけて言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。

(和歌は、人の心を種にたとえると、そこから無数の葉として出たものである。この世に暮らしている人々は、さまざまなる事柄に接しているので、心に思うことを、見たことや聞いたことに託して言い表す。花の間でさえずる鶯、清流にすむ河鹿の声を聞くと、すべての人間、誰が歌を詠まないと云えるだろうか。)

言葉と人間の関係での日本人の自覚をさかのぼる時、紀貫之の「古今和歌集」仮名序を無視することはまず出来ない。殊に右の冒頭は、歌の起源を述べたものとして汎く知られている。彼は専ら、事を「やまと歌」に絞っているけれども、今になってみると、「やまと歌」は「文学」にも置きかえられるだけの内容をもっている。それだけのひろがりがある。

文学の起源や効用について、これほど簡明に大事を述べている文章も珍しい。「生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」。前例を知らないから何と面白い一節かと思う。発語のシヨウドウに当てられた光と、発語への経緯を見る目の冷静に、文章の長い生命が約束されている。

(竹西寛子『王朝文学とつき合う』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A イシヨウ

- ① 波乱のシヨウガイ
- ③ 俳優の着るイシヨウ
- ⑤ 知人をシヨウカイする

- ② 美術界のキヨシヨウ
- ④ 機械がコシヨウする

1

B ヨウニン

- ① 後継者をヨウセイする
- ③ イヨウな大きさ
- ⑤ カンヨウの精神

- ② 明るくヨウキな性格
- ④ 感情がコウヨウする

2

C ケンチヨ

- ① 講師をハケンする
- ③ 功績をケンシヨウする
- ⑤ 肉親をケンオする

- ② 役職をケンニンする
- ④ 会社をサイケンする

3

D エイビン

- ① 故人のイエイを飾る
- ③ エイゾウで記録する
- ⑤ 係長が本社へエイテンする

- ② 新進キエイの新人
- ④ 城のエイヘイが交替する

4

E ショウドウ

- ① 物語のシユウシヨウを読む
- ③ ショウシン試験に受かる
- ⑤ 優秀者をヒョウシヨウする

- ② 名前にケイシヨウを付ける
- ④ 爆発によるショウゲキを受ける

5

問二 空欄 ア・イ・ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア ①恒常的 ②否定的 ③生産的 ④定期的 ⑤希望的 6

イ ①効果的 ②営利的 ③打算的 ④魅力的 ⑤絶望的 7

ウ ①恣意的 ②世界的 ③基本的 ④日常的 ⑤常識的 8

問三 空欄 甲・乙・丙 に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

甲 ①裏も表もなく、 ②洋の東西を問わず、 ③いつでもどこでも、 ④良きにつけ悪しきにつけ、 9

乙 ① あらかじめ 予め拒否されるべき ②賞味期限のある ③永久に不滅の ④重複を恐れない 10

丙 ①達成感が得られる。 ②足をすくわれる。 ③滑ってしまう。 ④正解に導かれる。 11

問四 傍線部(一) 『源氏物語』の作者」は誰か。次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 清少納言
- ② 和泉式部
- ③ 紫式部
- ④ 小野小町
- ⑤ 額田王

12

問五 傍線部(二) 「紀貫之」の作品はどれか。次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 更級日記
- ② 古事記
- ③ 土佐日記
- ④ 放浪記
- ⑤ 伊勢物語

13

問六 傍線部(三) 「古典を読むには相当のエネルギーがいる。若さがある。根気がある。」とあるが、筆者がそう思うのはなぜか。次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ① 若い間でないとい体力や時間に余裕がなく、年を取ってからでは難しいから
- ② 古典は学校の授業で学べるので、テキストをわざわざ用意する必要がないから
- ③ 古典は自分に引き寄せて素直に読み、時には反発を感じることが必要だから
- ④ 年齢を重ねると読む側に固定観念が生まれてしまつて、ひらめきが少ないから

問七 この文章で筆者が述べている内容と異なるものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

15

16

- ① 紀貫之が「古今和歌集」の序文で述べている内容は、大げさすぎて文学の本質を表していない。
- ② 人間の感情は波乱万丈の歴史書の中よりも、特殊な男女の姿を綴った文学にこそ描き出されているものである。
- ③ 文学は何を書いてもいいが、それをすぐれた表現にまで高めるのは今も昔も作者の責任である。
- ④ 古典を素直に読めば、もし違和感を覚えることがあっても、やがては、それ以上の魅力を感じることができる。
- ⑤ 物語を味わうということは、決してそこに書かれているストーリーを知ることだけではない。
- ⑥ 文学の作者は同時代の人たちの喜怒哀楽を客観的に観察して描き、自分の感情を加えることはなかった。

問八 本文につける「見出し」として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

17

① 古典文学の効用

② 古典文学の書き方

③ 古典文学の基本

④ 古典文学の読み方

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

辞典の読者と辞典編集者とが行き違ふことがあるとすれば、一番の理由は、おそらく、ことばの正しさについて、辞典読者が辞典編集者よりずっと楽天的だという点にあると思われまふ。

古典文学などに現れて以後まったく使われないうなことばでなく、現代社会の中で生きていることばであれば、今に到るまでに必ずなんらかの変化を受け、また今も変化し続けている——いささかでもことばを観察すれば、それは明らかです。

その変化とは、もとの意味・用法からの逸脱です。それを「乱れ」と呼ぶのであれば、ことばはいつも「乱れ」ています。しかし、ことばの正しさとはいつの時点での姿を言うのでしょうか。いまの日本語は乱れているから、奈良時代のことばに戻れ、とおっしゃる方はいません。現在から見て少し過去の辺りの日本語を「正しい」として、そこからの「変化」を「乱れ」として嘆かれるのです。

ことばが絶えず変わっていることを、辞典編集者は仕事柄忘れることができません。ア、辞典を使う方は時折それに気付いては、フカイに思ったり怒ったりされるのです。変化することこそ通常のあり方であることばについて、辞典が忠実であるうとすれば、現時点で大勢が使っていることばをそのままに記述し、せいぜい変化してきた経過について言及する、といった姿勢をとるほかにはありません。

辞典を使われる方が「正しい日本語を」と言われる内容は、「変化」「乱れ」を抑えようということの他に、^(二)実は、もう一つあるようにです。それは、ことばの意味はいつも「正確」「厳密」であるべきだ、とすることです。正しいことば(単語)は、いつでもどんな場面においても、きちんとその単語に対応した普遍かつ不変の意味^{リョウイキ}を持つべきだ、とでも言うような信仰です。そのような深い信仰心を持つ方は、辞典に「正しい日本語」というよりは「厳密な定義」を要求されるのです。「辞典はことばを定義するもの」とおっしゃる方もいますが、それは違います。国語辞典はことばの意味を記述しますが、定義はしません。

「老人」とは厳密には何歳からを言うのか、「未明」は何時から何時までか、「岩」と「石」と「砂」、イ「湖」と「沼」と「池」とはどう定義されるのか。そこを厳密にしたからといって、日々の生活が特に変わることもないという問題が大

半ですが、気になると、きちんとしないではいられなくなるものようです。電話でいきなり「夜中に日付が変わる瞬間は、今日の内に入るのか翌日か（一二時か〇時か）」などと聞かれると、とっさに何のことかとまどろいのですが、辞典編集部にこうした問い合わせは少なからずあります。

用する閉じた世界の中で生きるほかないのですが、厳密屋さんはそうしたことが可能だと思っておられるようなのです。

「定義」というのはある特定の世界の中での約束のことです。このことばはこういう時にこういう意味で使うことにしましょうという取り決めにはなりません。私たちは時としてその世界の中で会話することもありますが、いつもはもっと広いのびのびとしたところで、特別に約束をしたこともないことばを使って、感じたり考えたり表現したりしています。そのことばを、人工言語に対して自然言語と言うこともあります。一般の国語辞典はその自然言語の辞書なのです。

エ、ことばを定義している辞書は専門分野の事典や用語集に見られます。

先の「老人」について、普通の国語辞典は「年とった人。年寄り。」くらいしか書いてありません。何歳から、などという明確な取り決めは自然言語にはありません。それは、行政上の都合とか統計をとるベンギとかのために役所や法律が、例えば「老人福祉法」では六五歳以上を「老人」とする、と決めただけのものであつて、「老人」の意味ではありません。にもかかわらず、「老人」ということばの意味が曖昧だなどということはないのです。「老人」の語は、さまざまの場面でさまざまの対象（人）を指すことが可能ですが、その対象（人）をどう捉えようとしているか、それらに向けた視線の方向は共通で、多くの人々に共有されているのです。対象を捉えようとして向けた視線、その向きがことばの意味というものであるうと思うのです。

「砂」は、『広辞苑』によれば、「細かい岩石の粒の集合。主に各種鉱物の粒子から成る。通常、径二ミリメートル以下、一六分の一ミリメートル以上の粒子をいう。」とあります。岩石学ではこのように取り決めているのですが、それが「通常」かどうかは疑問です。そんな数字を知らなくても、**オ** を持ち合わせていなくても、私たちは日常の場でソクザに「石」か「砂」かを判別し、何の支障もなく会話することができます。投げるのは石、砂は撒く。時として石には躓き、また砂を噛む思いもするでしょう。ことばが表す世界は思いのほか広くて、がちがちの定義では捉えきれないふくらみを持っているものです。

日常普通に使っている日本語なのに、ふと自信が持たなくなつて、辞書で意味を確かめるといふことはあります。それに答え

るのが辞書の仕事です。しかし、そこで辞書の記述が不満だとして、とたんに「正確」で「厳密」な「定義」の方向に向かってしまう方がおられるのが残念でなりません。「厳密」がことばとして「正しい」とは限らないのです。

例えば、天気予報や新聞の報道では、「未明」を「午前〇時から午前三時頃まで」と決めていますが、「未明」の語の本来の意味（まだ夜が明けきらないころ、明け方）に比してずいぶん早過ぎはしないでしょうか。^四「厳密に言うためと称して、正しい意味を壊してしまつてよいはずがありません。」

天気予報と言えば、私たちが何気なく聞いている「曇り、一時、雨」の「曇り」「一時」「雨」の用語は、それぞれが驚くほど厳密に定義されています。例えば、「一時」は「現象が連続的に起こり、その現象の発現期間が予報期間の1/4未満のとき」であり、その「連続的」とは「現象の切れ間がおよそ一時間未満」の場合を言うのだと取り決めているのです。ただ傘が要るかどうかを知りたいだけのときでも、天気予報はこんなに正確に、こんなにキウクツに、発表されているのですね。

気象庁は理由があつてそうしているわけですが、私たちは、そこまで頑張らなくてもよいのにと思う場合で、あるはずの正解を求めようとする場合があります。厳密な正しいことばを求めようとするあまり、つい、その正解はただ一つで、他は誤りと思いがちです。漢字の使い分け、送り仮名、漢字を手書き（筆写）する時の止めや撥^ハね。

困ったことに、学校教育の現場でも、指導上のベンギからか、正解が一つしかないような教え方がされることがままあります。「テストで辞典通りに書いて、うちの子どもが×をもらった。なぜか」というような電話が、学校の先生にではなく辞典編集部にかけることは少なくありません。ことばの教育とは何か、そのそもそもについて、専門家である先生方には是非とも考えていただきたい、切実にそう思います。

ことばについて、こうなくてはならぬという一つだけの正解がないと同時に、絶対的な間違いということも非常に少ないものです。ことばはそんなやわなものではない。ある制約がありながらも、その中で自由にできる余地のことを、「遊び」とか「はば」とか言うことがあります。ことばには「はば」があるのです。

（増井元『辞書の仕事』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A フカイ

- ①家がトウカイする
- ③自肅ジカイする
- ⑤老人をカイゴする

- ②病気がゼンカイする
- ④議会をカイサンする

18

B リヨウイキ

- ①会社のドウリヨウ
- ③植民地のセンリヨウ
- ⑤山のキュウリヨウ

- ②ユウリヨウの施設
- ④リキリヨウがある人物

19

C ベンギ

- ①ジギを得る
- ③半信ハンギで聞く
- ⑤国会でギロンする

- ②紙幣をギゾウする
- ④舞台でエンギする

20

D ソクザ

- ①学校のキソクを守る
- ③難間にソクトウする
- ⑤天体をカンソクする

- ②販売をソクシンする
- ④旧友のシヨウソクを尋ねる

21

E キュウクツ

- ①キュウバをしのぐ
- ③真相をキュウメイする
- ⑤失敗をキュウダンする

- ②遭難者のキュウエンに行く
- ④被災地のキュウジョウを訴える

22

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各郡の①～⑤の中

からそれぞれ一つずつ選べ。

ア ①したがって ②または ③しかし ④それでも ⑤すなわち

イ ①あるいは ②その上 ③もちろん ④しかるに ⑤おそらく

ウ ①表面的に ②間接的に ③本質的に ④徹底的に ⑤恒常的に

エ ①同様に ②一方 ③他には ④そして ⑤大体

オ ①常識 ②手段 ③技術 ④感覚 ⑤物差し

27

26

25

24

23

問三 傍線部(一)「実は、もう一つあるようです」の「もう一つ」とは何を指しているか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 国語辞典の言葉の意味は「正しい日本語」でなければならない。
- ② 正しいことばにはその単語に対応した不変の意味があるわけではない。
- ③ 国語辞典は必ずしもことばの意味を定義するものではない。
- ④ ことばの意味はつねに正しく厳密でなければならない。
- ⑤ 一つ一つの言葉の定義を厳密にしても日常生活には何の影響もない。

28

問四 傍線部(二)「その定義が通用する閉じた世界の中で生きるほかない」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 言葉をすべて厳密に定義することは辞典の編集者には必要なことであるということ
- ② 言葉がすべて厳密に定義された、実際にはあり得ない世界の中で生きるということ
- ③ 言葉の「定義」とはある特定の世界の中でのみ通用する約束にすぎないということ
- ④ 言葉を厳密に定義しなければ気がすまない人は、辞書を利用する資格がないということ
- ⑤ 言葉があまりにも厳密でありすぎるとその中で生活することが息苦しくなるということ

29

問五 傍線部(三)「対象を捉えようとして向けた視線、その向きがことばの意味というものである」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

①ことばの意味とは、その対象に対する多くの人々の共通の認識である。

②「老人」の語は、さまざまな場面でさまざまな対象を指すことが可能である。

③ことばの意味とは、その対象を厳密に定義するということである。

④ことばの意味について、正確で厳密に定義することが辞書の役割である。

⑤ことばの表す世界は広くて、一つの言葉でその対象を示すことは難しい。

30

問六 傍線部(四)「厳密に言うためと称して、正しい意味を壊してしまつてよいはありません」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

①天気予報などは、「未明」を「午前〇時から午前二時頃まで」と決めているが、本来の意味より早すぎる。

②私たちにとつてただ傘が要るかどうかわりたいだけの時でも、天気予報などでは言葉の意味を正確かつ厳密に定めて発表している。

③対象を厳密に規定しようとした結果、ことばが本来の意味から遠ざかつてしまうことはよくないことである。

④私たちにとつてその必要がない場面でも、あるべき厳密な正解を求めようすることはよくないことである。

⑤辞書の記述が曖昧なとき、「正確」で「厳密」な「定義」を求めようとすることはよくないことである。

31

問七 この文章に題名を付けるとすれば何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ①正しい日本語について
- ②辞典の読者とは
- ③正確なことばの使い方
- ④ことばには「はば」がある
- ⑤ことばの定義について